

第1学年 社会科学習指導案

日 時 平成21年11月17日5校時
場 所 奥州市立江刺東中学校1年A組教室
生 徒 1年A組23名
授業者 教諭 田 崎 義 久

1 単元名 身近な地域の調査「岩手・宮城内陸地震」

2 単元について

(1) 教材観

本単元では身近な地域の調査の中でも、「岩手・宮城内陸地震」について時間をかけて取り扱う。新学習指導要領では、「(2) 日本の様々な地域」の「エ 身近な地域の調査」の項目には、「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うとともに、市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる」とある。特に「地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う」とは、改正された教育基本法や学校教育法で明記された、「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」ことを受け、社会参画の視点を重視して、この身近な地域の調査の学習を進めることを意味している。これは社会参画の視点からそのねらいを明確にするため、「地理的な見方や考え方」を構成する一つの柱である「地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像を考える」ための学習を充実させるようにしたものである。ここで言う地域の課題は、「国際化、情報化、交通の発達、高齢化、防災、環境保全等の面から地域の変容をたどったり、予測したりすることで見だしやすくなる」とあり、岩手・宮城内陸地震はまさしく防災の例にあたると思った。現行の小学校指導要領では、第3学年及び第4学年で、「地域社会における災害及び事故から人々の安全を守る工夫について、次のことを見学したり調査したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や努力を考えるようにする」とあり、「ア 関係の諸機関が相互に連絡を取り合いながら緊急に対処する体制をとっていること」があげられている。学区内には5校の小学校があり、駐在所や盛岡の消防署を見学している学校もあり、3校では地元の江刺消防署を見学している。そこでは、煙体験やロープでの訓練などを体験し、119番と出動の仕組みも学んでいる。

本単元での基礎的・基本的内容は、①大災害が発生すれば被災地の消防機関だけでなく、総務省消防庁を中心にした緊急消防援助隊をはじめ、警察、自衛隊など国民の命を守る組織的な機関があること、②防災対策については一人一人の意識を高め、できることを地域住民で協力して実行することの必要性ととらえた。

岩手・宮城内陸地震は発生から一年余りが過ぎ、地震の規模に比べ被害が比較的少なかったこともありこのまま風化されてしまう恐れもある。また宮城県沖地震については、今後30年以内に、震度6強、M7.5前後の発生する確率は99%というデータもある。そこで、助け合いの重要性を理解し、次に大きな地震が起きた時、被害をできるだけ少なくするために自分ができることを考え、積極的に表現させたいと考えた。本教材は阪神・淡路大震災の教訓にあるように、震災などの限定された場面だけでな

く、普段の生活の中で、助け合いの精神やコミュニケーション、地域とのつながりの大切さなどをこれからの生き方の中で見直すために適切な教材である。

(2) 生徒観

生徒たちは、岩手・宮城内陸地震が起きた時は、小学校6年生だったので当日自分が何をしていたかは覚えていた。今回の地震で印象に残っていることや最も強く感じたことを聞くと、地震が怖かった、強かったやいろいろな物が落ちてきてびっくりした、物や家などが壊れたということを書いている生徒が多かった。今後の行動につながることを書いている生徒は1人だけであった。そのことから今回地域の課題を防災面から考える意義があると言える。また生徒は大きな地震については、揺れが大きいや物や家がこわれる、落ちてくる、倒れるなどの被害をあげている。

今回の地震についてもほとんどの生徒が上記の理由から、大きな地震だったと感じている。ニュースでいろいろ放送されて騒がれていたからという意見もあった。生徒が今回の岩手・宮城内陸地震で知っていることも身の回りで起きたことやニュースなどの報道で取り上げられた事実がほとんどである。このことから、生徒が地震のことで調べてみたいことも、どのような被害を受けたかどんな被害が多かったかという漠然としたものが多いのも仕方ないことである。そこで仮設住宅の被害者は今どうしているのかという疑問をもち、生徒の関心を人や組織的な機関などにも向けさせ、一人一人の意識を高め、地域住民と協力して防災に取り組む必要性につなげていきたい。

(3) 指導観

本単元では、岩手・宮城内陸地震の概要について学んだ後で、さらにグループに分かれて調査活動を行うことにした。震源が山中であったことや地震の規模に比べ被害が比較的少なかったとはいえ、今回の地震が日常生活に及ぼした影響は大きい。生徒が生活舞台にしている江刺区だけでなく、奥州市全体や県南地区にも調査の範囲を広げることで、どこか遠い所で起きた地震ではなく、身近で地震による被害があったことをもう一度思い出したり、改めて知ったりして風化させないようにしたいと考えた。調査活動を通して資料を作り、地域の課題を見だし考えたりすることができる考えた。また地震発生後の様々な活動それぞれには、助け合いの重要性を改めて感じるができる。特に救急や消防活動に視点を絞ったのは、日常の救急車や消防車両を通して活動をイメージしやすく、自分にも具体的にできることがあり実行したいという態度を養いたいと考えたからである。中学生のこの時期にできることには限りがあるが、防災の意識はこれから先、どこで生活することになっても高めておかなければならないことでもある。

大地震の際の主に救急や消防活動を題材として、生徒それぞれが大丈夫なのか不安はあるのかを考えていく。気付く段階で、学区の玉里保育所の被害を取り上げたのは、身近で起きた具体例の一つであるだけでなく、今後それはまた起こりうるという現実があり、生徒が考えなければならない地域の課題であり意欲をもって学習することができる考えたからである。生徒は自らの問題としてとらえ、大丈夫なのか不安はあるのか考えるが、どちらの立場であっても、大切なのは自分がなぜそう考えたのか根拠を友人に伝えることである。そこから自分と違う立場の友人の考えを知り、自分の防災意識を補充していくことも可能である。この議論をすることで、救急や消防活動だけでは限界があり解決できないことがあることを確認して、自分にもできることがあることを考えさせたい。そして、具体的にできることを考えて地域の人々と協力して防災に取り組む態度を育てたい。

3 単元の目標

- ・ 岩手・宮城内陸地震から地震など災害に対して、一人一人の防災意識を高め、できることを地域住民で協力して実行しようとする意欲をもつ。(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・ 地震など災害に対して、自分ができることをさまざまな視点から具体的に考えることができる。(社会的な思考・判断)
- ・ 岩手・宮城内陸地震の被害の様子がわかり、調査したことをまとめ、その事実に基づいて自分の考えを表現できる。(資料活用の技能・表現)
- ・ 岩手・宮城内陸地震の概要、緊急消防援助隊をはじめ警察、自衛隊など組織的な機関の存在、一人一人の意識を高めできることを地域住民で協力して実行することの必要性について理解できる。(社会的事象についての知識・理解)

4 単元の指導計画と評価計画

時間	主な学習内容	目標	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	アンケート	岩手・宮城内陸地震を振り返る。学習の見通しをもつことができる。	地震当日の自分の動きを思い出そうとする。			
2	アンケート結果 地震の概要	岩手・宮城内陸地震に対する友人の考えを知る、また概要を理解する。	友人の考えに共感したり、違いに気付いたりできる。			岩手・宮城内陸地震の概要について知る。
3	調査項目の決定 質問事項を考える	調査項目を決める。	助け合いの重要性を改めて感じる活動に目を向けることができる。	テーマにそって、各グループで質問を考えることができる。		緊急消防援助隊や自衛隊、警察などの組織的な活動を理解する。
4 ～ 7	手紙書き 調査活動とそのまとめ	調査の手順や方法、まとめ方をグループで考えて取り組むことができる。	グループで協力して、手紙書きや作業に取り組むことができる。		岩手・宮城内陸地震の被害の様子がわかり、調査したことをまとめ、その事実に基づいて自分の考えを表現できる。	
8 ・ 9	発表	発表を聞いて、多くの人々の支えがあったことがわかる。	発表に耳を傾け、助け合いの重要性に共感することができる。	さまざまな活動の苦勞を知って、感謝の気持ちを持つことができる。	各グループの発表を聞いて、自分の考えを表現できる。	
10 本時	救急や消防活動	地元消防と緊急消防援助隊の活動から、さらに助け合いの重要性がわかり、自分ができることを考える。	一人一人の防災意識を高め、できることを地域住民で協力して実行する意欲をもつ。	自分ができることをさまざまな視点から具体的に考えることができる。		
11	まとめ	地元消防と横浜安全管理局の方のお話から、自分たちができることを検証する。		具体的に考えた自分ができることを意見交換して、行動に結びつけることができる。		一人一人の意識を高めできることを地域住民で協力して実行することの必要性について理解する。

5 本時の目標

- ・ 岩手・宮城内陸地震での地元消防本部の活動の他に、奥州市に駆けつけてくれた緊急消防援助隊やヘリコプターによる救助活動などから、助け合いの重要性に関心をもつ。
- ・ 次に大きな地震が起きた時、自分ができることを考え、具体的に書くことができる

6 本時の指導構想

生徒の多くは大きな地震が起きてけがをしたり火事が起きたりしても、いざという時には救急車や消防車が駆けつけ助けてくれると思っている。玉里保育所の例でも実際に駆けつけて、けが人を搬送してくれている。また被災地の地元消防機関だけでは対処できないことを想定して、阪神・淡路大震災後に緊急消防援助隊が組織されているのも事実である。しかし、災害が大きくなればなるほど電話がつながらなかつたり、道路が寸断されたり、火災多発の場合は救急をストップしなければならなかつたりする事態もあり、救急車や消防車は被災現場に駆けつけることは難しくなる。だからこそ、被害を最小限にするために未然に防ぐ努力や準備、そしていざ起きてしまった場合には一人一人が具体的にできることを考えて、地域の人々と協力して実行することが求められている。生徒には地元消防機関だけでは数が少なく、また緊急消防援助隊の到着には時間がかかる現実から、自分たちでも何かしなければいけないということに気付かせて、自分ができることを考え、具体的に書かせたい。さらに各自が一人でできることで終わりではなく、お互いに助け合い地域の防災力を高める必要があると考えている。また当然といえばそれまでだが、消防士や保育士の仕事に対する思いを生徒に伝えて、職業に対する理解を深めたいと考えた。

7 本時の評価規準

観点	A：十分満足できる	B：おおむね満足できる	C：生徒への支援
関心・意欲・態度	高い防災意識から、できることを地域住民と協力して実行したいという意欲を持つ。	地元消防本部や緊急消防援助隊などの活動から、助け合いの重要さや自分にもできることに関心をもつ。	地元消防本部や緊急消防援助隊などの活動から、助け合いがあったことに気付かせる。
思考・判断	自分ができることをさまざまな視点から具体的に考え、地域の人々と協力して実行したいことを考えることができる。	自分ができることをさまざまな視点から具体的に考えることができる。	大地震が起きた時を想定して、自分も何かできることに気付かせる。

8 本時の展開

		学習活動及び学習内容	指導上の留意点	形態・教材・教具
導入 15分	気付く	1 準備 ・畳を敷く ・柔道着に着替える 2 準備運動 ・体操 ・ストレッチ 3 挨拶 ・黙想 ・挨拶 4 体づくり運動 ・おんぶ一周 ・押し合い ・引き合い ・うつ伏せ返し 5 受け身の練習 ・2人組うさぎ跳び後ろ受け身 6 学習内容、課題の把握 ・得意技で自護体の相手・崩れた相手を投げてみる【気付く】	・畳の隙間に注意 ・帯の結び方に注意 ・筋肉を温めることを意識させる ・正しい礼法を徹底させる ・健康観察 ・周囲に注意する ・頭を打たないように注意する ※1【気付く】体勢が崩れた相手は投げやすいのは当然であり、そのために崩しというものが重要であることに気付かせる	観察 ・畳 ・柔道衣 観察 一斉 観察 観察 観察
		得意技の崩しと体さばきを身につけよう！		
展開 30分	予想する	7 学習カードに、得意技、崩しの方向、体さばきを記入させる【予想する】	※2【予想する】崩しと体さばきを考えさせる	カード記入
	確かめる	8 得意技の崩しと体さばき練習【確かめる】 9 試合 ・1試合2分（6人グループ）	※3【確かめる】得意技の崩しと体さばきを身に付ける ・うまくできない生徒に個別指導を行う ・得意技の崩しと体さばきを積極的に使わせる	観察 ・デジタルタイマー
終末 5分	まとめる	10 整理運動 11 学習のまとめ ・自己評価 12 挨拶 ・黙想 ・挨拶 13 片付け ・着替え	・自己評価をさせるとともに教師のまとめと次時の確認を行う ・正しい礼法を徹底させる ・健康観察	一斉 カード記入

		・畳の片付け		
--	--	--------	--	--